

「目次」をつかって 全体の構成を決めましょう

読み手の共感を得られるテーマの選定

自分史の利点は、書き手にとって書きやすく、読むほうもラクだというだけではありません。

長編の自分史を、ある強烈な体験談に絞って書いた場合を想定してみましょう。あなたにとってそれは、とても思い入れのあるテーマには違いありませんが、読み手にとって関心が薄いものだったら、それでおしまいです。長い文章を最後まで読む気にならないでしょう。

短いエッセイ集なら、贈る先を思い浮かべながら、これなら興味を持ってもらえそう、共感を得られそうというテーマを選んでいくことができます。

掲載するすべてのテーマに共感してもらおうなどと望むことはありません。ある人はこのテーマに、またある人は別のテーマにと、一つでも二つでも共感を得られれば、それでもう大成功なのです。

ひとの関心事は十人十色。ですから、各エッセイのテーマは、なるべく幅広く、多方面に散らし、それぞれ簡潔に、一章ごと完結するのがポイントです。

書きたいテーマは考え出せたでしょうか。あり余るほど思い浮かんだという方は、大いに結構。その中からどれを選ぶかが勝負です。

なかなか思いつからない、10も15もテーマが揃わないという方は、自作の年表を見て、贈る相手を思い浮かべ、関心を持ちそうな事柄を選びましょう。これまで何十年と生き抜いて、現在があるあなたです。見つからないはずがありません。自信を持つことです。

何も大受けをねらわなくていいのです。これまで生きてきたワンシーン、ワンシーンの中で、特に印象深かったこと、心に残る言葉、苦しい時に受けた好意への感謝といった中から、素直な気持ちで選びましょう。

特に重要なキーワードは「感謝」です。感謝の対象は、親、兄弟姉妹、家族、親戚から、長いおつきあいのクラスメート、友人、知人、趣味のサークルの仲間、近隣の方々など、それは大勢いるはず。そして、この多くが自分史の贈り先とも重なるはず。「感謝」の気持ちの中から、いくつもテーマが見つかるはず。

目次の各項目のタイトルはとても重要

書くテーマが見つかったでしょうか。でも、書き出したテーマは、この段階ではまだ「候補」に過ぎません。候補の中から、共感を得られそうなものに絞り込み、まず「仮の目次」をつくってみましょう。

事柄の新旧は無視して、どんな順に編集したら全体のバランスが取れ、読みやすいかで、順番を入れ替えてみます。

テーマの絞り込みと掲載順を決めたら、目次のテーマ別タイトルもまだ「仮」の段階でしょうから、もっといいものにできないか、トコトン考えましょう。

贈られた自分史を手にとった方は、まず目次の見出しを見て、面白そうかどうか、どこから読み始めようか判断するわけですから、目次はいわばキャッチコピーです。あだおろそかにはできません。見ただけでワクワクするような目次ができれば、コンパクト自分史作りは半ば近くまで進んだといってもいいくらいなのです。